

国際華文文芸営ノート

——シンガポール・マレーシア華文文芸の総括と展望——

今 富 正 巳

まえがき

1983年1月13日から19日までの一週間、シンガポールで国際華文文芸営 (International Chinese Writers' Forum) が開催された。シンガポール共和国の人民協会・シンガポール作家協会・シンガポール文芸研究会・星洲日報が共催したこの大会には、中国の艾青(詩人)・その夫人高瑛(詩人)・蕭乾(作家・翻訳家)その夫人文潔若(翻訳家)・蕭軍(作家)その娘蕭耘(作家・音楽家)ら六人、台湾の洛夫(詩人)、蓉子(女流詩人)、呉宏一(文芸評論家・台湾大学教授)、香港の彦火(文芸評論家)、マレーシアの方北方(作家)、雪風(文芸評論家)、甄供(文芸評論家)、フィリピンの施頴州(詩人)、アメリカの聶華苓(女流作家)、於梨華(女流作家)、鄭愁予(詩人)、劉大任(作家)、韓国人の許世旭(詩人・ソウル外国語大学教授)ら及び筆者の合計20人の外国人が招待されて参加した。シンガポール側は、教育部(文部省)政務次長何家良氏がこの大会の工作委員会主席(Chairman of Working Committee)に当り、運営には人民協会出版局長陳聞察氏らの人々が実務に当ると共に、総理公署高級政務部長兼人民協会副主席李炯才氏と文化部政務部長鄭攝治氏が大いに協力支援し、大会成功の為の柱となった。華人・マレー人・インド人の三大民族から成る、複合言語国家であるシンガポールで、華文文学だけを目的とした大会を開き、而も中国大陸からも作家を招待することは、この国としては、かなり微妙な問題を含むものであったようである。聞く所によれば、シンガポール政府は金銭上の援助は全く行なわず、治安機関当局は最後ま

で、大会そのものに難色を示したという。そこでこの大会の費用は人民協会(与党所属の人民団体)、星洲日報が負担する一方、星洲日報の大株主連瀛洲氏が自己の経営する文華大酒店(マンダリンホテル)の宿泊料及び会場の費用を含めて20万シンガポールドルを寄付して賄うことになった。この大会の開催が決定し、中国大陸からも有名作家が来ることが周知されたとき、多数の華人実業家や団体から寄付の意志表示があったが、政府は全般の状況を深く考慮したうえで、このような一切の寄付を禁止したという話も聞いた。“華文文芸”の為に大会が開かれ、中国大陸をはじめ世界の各地から華文文芸作家——当然華人である——がシンガポールに集ることの意義は、これら華人社会の強烈な反応ひとつを眺めても、十分に推察し得るであろう。

大会は13日夜に始まり19日夜に閉幕したが、外国人招待者はマンダリンホテルに宿泊し、主会場もこのホテルの大会議室文華閣に設けられ、連日出席する数百人の現地参加者とともに熱心に討議が続けられた。大会は討論研究が主で、講演は聶華苓女士の《華文文芸と世界文芸》、筆者の《日本における馬華文芸研究》の二項のみであった。

この大会には、視る角度によりいろいろな意義があるだろうが、筆者はこの大会ではそれぞれの専門家が自己の研究分野をまとめて発表したもので、シンガポール・マレーシア華文文学のまたとない総括と展望になったこと、各国の華人作家が意見を述べたので、それがすぐれた問題提起になったこと、多くの現地の人と語ったので絶好の取材の場になったことなどに大きな

意義を見出している。このノートでは、なるべく何が語られたか、何が問題となったかを具体的に記し、この分野の研究者の参考に供したい。

なお文芸賞の“賞”は、この国の慣用語で“中学生文芸賞”のように集って研鑽する場を指しているのである。その実体は“大会”か“研究学習会”である。

“国際華文文芸賞”の背景

前記で述べたように、シンガポールでのこの種の行事は、日本のような単一民族、単一言語社会では想像できない微妙鋭敏な問題を伴っている。華人がさまざまな困難をいとわずに、このような大会の開催に向って情熱的に努力するのは何故であろうか。

この大会の各処で話題になったが、それは結局華人のアイデンティティ——華語では認同——を求める心意の帰結ということなろう。アイデンティティの問題は海外に住む華人にとって自己の確認、人格の尊厳の獲得の問題につながる。そして究極的にはルーツの確認——華語では尋根——に至ることは容易に理解し得よう。

華人は経済、商業に長ずると言われるが、これとともに金銭や俗界の利益を度外視して、抽象的な価値を求める華人のもう一つの重大な側面がある。

この大会を催したいという願望は数年前からこの国の関係者の間で醗酵されていた。その背景を知るためには、まずこの国の華語(Chinese Mandarine)の問題や華文文学の状況や言語をめぐる社会状況から理解しなければならないが、それらについては既に小論《シンガポール華人の言語生活についての調査・東洋大学アジア・アフリカ文化研究所研究年報16号1982年3月》と《マレーシア華人の言語と華文文学の調査報告、同年報1983年3月》ならびに東洋大学昭和56年度特別研究報告書、同57年度特別研究報告書所載の《東南アジアにおける華人社会の変貌》の共同作業報告のなかの筆者の担当小論などに述べているので、ここでは概略にとどめ

ておきたい。

第二次世界大戦の後、複雑な過程を経て、1957年にマラヤ連邦が成立し、更に1965年に至り、シンガポール共和国がマラヤ連邦から分離独立した。シンガポールは、1970年の全国人口調査によれば人口約240万人、主要人種の百分比は華人76.2%、マレー人15%、インド人7%、その他1.8%であり、華人社会は10以上の方言グループから成っている。したがって、この社会の言語生活はきわめて面倒な状況を逞しており、大部分の人が二つ以上の言語を操るが、四つの公用語を完全に話せる者は必ずしも多くはない。憲法はマレー語を国語、華語、タミール語、英語を公用語と定めている。実際には英語が共通語としての地位を占めつつあり、英語こそ将来を約束された実質的な“国語”だといえる。憲法で国語と規定されたマレー語は国歌の歌詞や軍隊の号令に“国語”として象徴的に使われている程度である。現実的必要性のある場合を除き、公文も、議会の議論も、空港や官庁の案内標識も、道路標識も、すべて英語であり、新聞や広告の類も実質的に英語優先であり、その方が料金も高い。

このような状況のもとで、漢語系の言葉話す華人社会で不安を呼び、さまざまな意見が噴出したのは無理からぬことである。シンガポールの華人人口はおよそ180万人で殆んどすべてが中国の広東省・福建省から南渡した者の子孫である。マレー半島地区における華人史については諸説があり、唐代、宋代に遡る見方もあるが、本格的な移民が始ったのは明末(16—17世紀)だといわれる。中国国内の動乱を避けて南来移住したものである。更に清朝末期に至り、政権の衰退に伴い海禁がゆるみはじめたので華人の南渡移住が増えて来た。ちょうどこの状況に符節を合はすように、英国のマレー植民地経営が進展したので、マレー半島で英国人が必要とする良質労働力を供給する形で華人労働者の南渡が急増した。華人移民は少数の自由移民を除いて、大多数は契約労働者(Contract Laborers)や借貸券制度(Credit System)による労働者

で、集団的な存在であった。これら労働者が中国を離れたのは正に背井離郷に表徴されるように、郷里の生活の貧窮、天災人禍からの脱出を考え、終には国内の生活に見切りをつけて海外に新天地を求める等の理由に因るものが多かった。こうした背景のもとで、多くの華人労働者がマレー半島に“流入”した。

英人フランシス・ライトが、ペナンに上陸したのは1786年、これを完全に占拠したのは1791年で、その4年後に英国はマラッカ港を占拠した、1819年には英人ラッフルズは安い値段でシンガポールを買いとった。その後マレー半島で英人はゴム園と錫鉱山の経営を中心に本格的な植民地経営の時代に入ったが、奴隷売買が許されなくなっていた当時、英人は最も良質、最も獲得しやすい労働力として華人労働者を好んだ。このような状況のもとで、1800年には、ペナンで広東人と福建人が共同で宗教寺院広福宮を建立し、1801年には客家人の地縁団体として嘉応会館が成立している。各年次別の華人人口の増加の正確な実態はわからないが、華人の各種社会団体は、1801年の嘉応会館にはじまり、1978年10月には5272個にまで増えた。西マレーシアの1970年の人口統計によれば、全人口881万人のうち、マレー人が469万人で53.2%を占めるのに対して、華人は312万人で、35.4%を占めているから、シンガポールの華人人口と併せて考えれば、全マレー半島の人口の半分が華人ということになる。マラヤ連邦がシンガポールを分離させた理由の一つは、このような華人人口問題であるといわれる。

このように、マレー半島の華人は数も多く、成熟した華人社会を形成するに至った。

こうした力をもった華人も、こと言語に関する限り、数の力だけで自己の伝統的な生活を守り通すことはできない状況におかれている。マレーシアではマレー人を主体とする政府がブミプトラ政策の下で（華語では大馬主義という）華語を公用語と認めていないし、シンガポールでも華人数数の政権でありながら英語優先政策を強力に実行しているからである。ここに華人

の欲求不満が生じ、一種の危機感さえ生ずるに至っている。

シンガポールの華人は広東省、福建省を祖籍とする者が絶対多数で、その方言は十種を越える有様で、華人相互間の究極的な共通語は主要流通方言たる福建語よりもむしろ英語になるかも知れぬと恐れる意見さえ出ている。そこで政府は「多講華語、少説方言」のスローガンを唱えることになった。華人のアイデンティティを華語（標準中国語）によって確保しようというわけである。その結果、華語は一定の地位を得るかのようにも見えたが、政府は二言語政策を実施し、華人子弟は第一言語英語と第二言語華語を学ぶこと、前者は、完全に読み、書き・聞き・話せるようにする、後者は大体話せる程度でよいものとした。英語を通じて西欧の先進的科学技术を吸収し華語により東洋の精神、倫理、価値観を保持すること、即ち“和魂洋才”のシンガポールの実践を企求した。華人に対して、敢えて第一言語として英語を学ばせるのは、言語を気軽に交換するようで異様にも見えるが、過去の宗主国が英国であり、長い間英語のみが公用語であった事や、数の多寡はともかくこの国が三大民族から成っていること、周辺のイスラム諸国との対応のしかたなどを考慮すれば、英語を実質的な国語としたのは理解できることである。

しかし、本来ある方言的環境の中で成長した華人が、英語を第一言語、華語を第二言語とすることはかなりの大事業であり、むかしの支配者イギリス人でさえもできなかったことである。

一人の東洋人が欧米のある国に長年住んで、代を重ねてゆくうちに、欧米の教養文化に同化してしまうのはめずらしいことではないが、アジアに存在する独立国が、言語だけを英語化するのには、言語のいれかえ作業であり、史上めずらしい実験である。この過程でさまざまな議論が起った。英語化することにより華人のアイデンティティ、価値観・倫理観などが曖昧不明確になり、“華人らしい良さがなくなってきた”“英語国民になった華人の心はアジアのものな

のかそれともヨーロッパのものなのか” “いくら英語を身につけても、華人は所詮イギリス人ではない。イギリス的な文化や意識形態を自己のものにすることは不可能である。高度な華語を失ってしまった華人とは一体何者なのであろうか” “国民のアパート生活化、核家族化の傾向の中で伝統の家族主義も老人への愛護尊重も失われつつある。” “高度工業化社会で青少年の精神が汚染された例は少なくない。” “このまま放任すればシンガポールの次の世代はすぐれた伝統と美德を失い、第二のエコノミックアニマルになってしまう。エコノミックアニマルの特徴は人間性、情義がひとかけらもなく、利益のみを追求する自己主義である” といった議論が盛んに行なわれた。英語化するのはいいが、華人の精神は何処へ往くのかという危機感が生れた。これの対応策として政府は強力な“儒家思想教育の推進”を公式に打出し、これを学校教育の場で正規の課目にすることを決定した。しかし、このような高度に知的な課目は当然第一言語である英語で行なうより他はない。現在儒家思想の教授法、教材の編集は、台湾、米国などの華人学者に依頼して作業が進められている。このように英語国民になると共に、儒家思想が再登場したのは、華人に思想的な危機感が生れたからであり、よろこぶべき思想的復興といった単純なものではない。華人社会の中には種々雑多な考え方はあるものの儒家思想教育の推進はそれぞれの立場から肯定されているようである。

他の小論でも述べたように、シンガポールの華人学校は華語源流校と英語源流校の別があるが、今日殆どどの学校が華英混合で、実質的に英語化しているので、華人学生の華語水準の低下現象が問題になっている。華文文学運動の視点に立てば、この現象は読者の質と量の低下を招く一方、新しい作家の出現にとっても好ましくない影響を及ぼす。このように、華文文学の関係者の間にも危機意識が生れた。

さらに、華語水準の低下は、華語新聞の読者の質と量の低下も招くのは確かで、それが華語紙の質と量に影響を及ぼす。政府は華語紙の前

途を見越して、1983年3月二大華語紙星洲日報と南洋商報を合併し、連合早報と連合晩報の朝刊・夕刊に改編させてしまった。反面では新しい英語紙が発行されている。斯かる情勢の下で華人社会では新聞の読者にも製作者にも華語問題を根底にした危機感が醸成されている。

ただ、ここでもう一度理解しておかねばならないのは、現在の言語政策を立案し推進しているのは同じく華人主体の政権であること、次に現行の言語政策を見て、華語の前途に危機感を抱く華人がいるのと同時に、逆にこの政策を支持する華人もいることである。大雑把に言えば、政府の政策は結果的に尊重されるとしても、個人的心情を問われるならば、為政者、政府公務員、市民を問わず華語の前途に疑問や不安を感じる者は少ない筈である。

このような社会的風潮の中で、国際華文文芸宮が開催されることになった。この実施に当たった人々が華語、華文文学、華語新聞の前途問題に対して一定の熱意を抱いている人々であることは言うまでもないが、諸般の様子から察するに、政府内部にもこの大会を催すこと、華文文学の発展の為にこのように力を払うことにより疑問を抱く部分もあったようで、このなかで万難を排して大会を実現させたことは高く評価されてよいことである。特に既に述べた李炯才氏、鄭振治氏、何家良氏の努力は、多分シンガポール華文文学運動史の中に特筆されるべきであろう。また、人民協会が全力を挙げて事に当たったことも印象に残るものであった。中国大陸と台湾の作家が仲よく同宿し、会議で同席し語り合い、宴席でも盃を交換したこと、その場所をシンガポールの華人が提供したこともまことに重大な意義があったわけで、シンガポール華人のよるこびと誇りが察せられた。

この大会は1982年の6月に開催される予定であったのが、12月に延び、さらに1983年1月に至って実現したものである。1月12日に予定されていた開会式は中国代表団の延着により1月13日夜に延期されたが、中国代表団はこれにも間に合はず、14日から活動に参加した。

上述の如きシンガポール華人社会の雰囲気、華文学・華語をとりまく状況、この行事を成功に導こうとする人々の努力、これらの事情を洞察するならば、この大会の大きな意義がよく理解できる。

以下大会の進行内容を具体的に述べよう。

(1) 開会式

開会式は1月13日夜8時からマンダリンホテルの文華閣で行なわれた。この会場は国際会議場としてよく使われる会場である。

まず何家良氏が次のような開会の辞を述べた。

『華語は悠久の歴史があり、世界中で最も多くの人に用いられる言語である。しかし、世界各国には異った社会制度、生活環境や歴史的背景があり、そこで育った作家にはきっとそれぞれ異った経験と洞察力がある。この文芸賞は世界各地の華文作家を一堂に集めて、交流をはかるといふ、歴史上未曾有の機会をつくった。これは、世界の華文文芸の発展と人類の文明に寄与するにちがいない。

シンガポールは東西交通の要衝に位置しており、われわれは二大文明の影響を受けつつ、両文明の優点を吸収したい。この国の華人は英語と華語を学ぶが、簡単に言えば、英語は生活のための道具であり、華語はそれによって自己を知り、自己のルーツをとりもどす言語である。歴史的な事情から、シンガポールにおける華語の歴史は古いし、多くの華文文芸作家が出ている。これまで、われわれは個別的な海外の文学者を招いて文芸座談会を開いたことはあるが、こんどのような大規模な国際的な華文作家大会を開いたことはなかった。ここで我が国の作家がこの機会に世界の著名な作家に会って、その経験を学びとることを望む。この大会に参加した外国から来た各位は帰国されたら、シンガポールの状況をよく紹介し、外国の人々のシンガポールについての理解をより一層深めてほしい。』

この開会の辞の中に、この大会を催したシン

ガポール人の意欲がよく吐露されている。

次いで、李炯才氏が次のような主題講演——Key Address——を発表した。

『今回の大会には諸国から作家が来られたが、これは国際情勢が緩和したおかげである。五年前であればとてもこうはいかなかったにちがいない。シンガポールは小さな島国で、資源もないが、西欧の工業技術を取り入れて、工業化を進めて、現代化と繁栄を求めている。たしかに、われわれはこれによって物質生活を改善したが、生活方式まで西欧化するわけにはゆかない。現在、シンガポールは四大文明——英国、マレー、インド、中国——を擁しているが、次代の華人がそのルーツを忘れないようにするために、華語普及を推進している。われわれは、華人が華語世界から学ぶことを願っている。工業技術の面で西欧から学び、物質的な幸福を求めているのと同様に、華語作家は世界のすぐれた作家の経験を学びとるべきである。こんどの大会は我が国では歴史上はじめての創挙である。

現在、シンガポールとマレーシアを除いては、東南アジア諸国では、華人はその地域に同化される過程にあり、華語の教育は奨励されていない、中国（台湾、香港、マカオを含む）以外の地域では、華語作品の読者は減少の一方であるがこれは華語作家にとって避けられぬ現実である。これに対する有効な対応策はなく、作品市場は縮小するばかりで、若い作家が創作活動を職業とすることは不可能である。たとえば、シンガポールでは三千冊の本を売るには数年の時間を要する有様である。しかし、これでもよい方だ。こんな状況のもとで、作家で生活をすれば、餓死するより他はないが、これがシンガポールに専門的な作家稼業が成立しない原因である。

私はすぐれた作家というものは戦争や危急に際して生れるものだと思う。人の心をゆさぶるような事件が、作家に対して刺戟を与えた結果、すぐれた作品を生み出すのだと思う。

中国では、五四運動時代の腐敗した社会や、

愚昧な中国人の無関心と麻痺状態の精神があればこそ、魯迅は阿Q正伝を書くことができた。これは二十世紀の中国人の想像力の極致を行くものだ。若し中国にあのような腐敗や政治がなければ、阿Q正伝もおそらく生れなかったであろう。

五四運動の影響はシンガポール・マレーシア華人にも及び、ただちに強い反応をおこさせた。日本の中国侵略とその後のマレーシア支配の時代にも多くの作品が生れた。シンガポールとマレーシアの文学の黄金時代は1937年の日本の中国侵略以後に現れた。この時代多くの中国作家たとえば王任叔や郁達夫らが南洋に逃れて来たが、現地の側からもすぐれた若い作家が輩出した。

さて、優秀な作家はまず、どんな条件が必要なのだろうか。ある人は、それは経験だという。たしかに、作品のよしあしは、経験の有無によるのが大きい。きびしい辛い生活体験をもつ作家は、豊富な素材をもっているにちがいないし、そこからすぐれた作品を書くものである。戦争の苦痛を経験しない人は、爆撃される場面や、爆撃を逃れて壕に入り、再び出て来たら、焦げた死体が至るところにころがっているのを目にしたときの気持などはわからないだろう。或いはまた、占領軍たる日本軍の歩哨に最敬礼をさせられたり、ビンタを食うときの気持はわかるまい、それがほんとうの屈辱というものの実感だったのだ。しかし、作家はその上に想像力というものが必要である。想像はよい作品を書くためのもう一つの条件である。作家は大衆とともにものごとを肌で感ずる感性が必要であり、この感性の上にせん細な観察力と分析力が必要である。作家に経験、想像力、感性および文章技巧が具わっていても、客観的な条件が悪くて、書けないかも知れない。しかし、そんな場合には、条件のよい所で工夫するより他はあるまい。例えばアメリカの華語作家は、香港で出版し、次にそれを中国をはじめ華語読者のいる所で売るわけだ。

華文作家の直面している一つの問題は、作品

の市場の問題である。既に述べたように、東南アジアでは、華文文学作品の市場はますますせばめられており主たる市場は中国（台湾と香港、マカオを含む）ということになるが、これらの国がわれわれの華文書籍の市場を開放してくれるのがいちばんよい。もし中国が外国での華語作品を出版販売してくれるならば、全世界の華文作家の創作意欲を高めることになるだろう。日本が発展した一つの理由は、世界中のすぐれた本は、何でも忽ち日本語に訳され、日本人はそれで最新の知識を得るからだといわれるが、同様に国外の華文作品が中国で出版されることは、中国にも利益になると思う。

私はこんどの大会によって、華文文芸の将来という問題について、何か収穫があるように願っている。自己の金銭的な利益のみを図る商人や権力だけを追求する政客にとっては、華文文学などは全く無用のものであろう。腹が空いたとき、文学で腹を充たすことはできないし、寒いときに文学で寒さを防ぐことはできないだろう。しかしながら文学の存在が人々の生活の一部分を成しているのは鉄の事実である。彼ら金銭至上の商人や権力のみを求める政客にとって、これは全く奇怪なことも知れないが、われわれは文学の未来と前途に関心を抱くが故に、この討論会を開くものである。』

何家良氏と李炯才氏の発言の要旨は、たくますして、シンガポール・マレーシアの華文文学（新馬華文文学）についての問題所在点を解説したかたちになっているが、李氏が末尾のところで華文文学の意義を理解し得ぬ商人や政治家をあげて強く批判しているのが強い印象を与える。それは具体的には一体どんな人を指すのか、いまここでそれをせんさくするのはやめておこう。

両氏の発言に共通しているのは、この地における華語の存在感の強調、華語華文文学をめぐる危機感、今後の努力のアピール、華語世界に於ける共同戦線の提唱などであろう。また、何故に国際華文文芸賞の挙行が必要なのかについても、両氏の発言の中に十分に説明がなされて

いる。特に李氏の発言は強い感銘を与えた。

1月14日の星洲日報の社説は次のように述べている『シンガポールは豆つぶのように小さい島国だが、国民の努力で世界の情報、貿易、航空、金融の中心になった。然しもの足りないのは文化の建設や人類の精神文明の面では物質文明の成果と並行していないことで、精神文明と物質文明がバランスをとれないときは、この社会は進歩を続け得ないし、経済も長く発展することはできない。華人は世界の各地に根を下しているが、文化の紐帯、精神のつながりはわれわれを一つに結びつけている。これは如何なる民族にも見られることだ。世界でも著名な華文作家が一堂に会したことは、文化の重視すべきことを再び世人に喚起し、国内の文芸家を上げますこととなるろう。』

1月18日の南洋商報社説は中国、台湾、香港がシンガポール、マレーシアの華文文学のために市場を開放するのはもとより重要なことだが『もっと大事なことは、次代をになう華人青少年の態度はどうか、彼らの華文の力はどうかということである。これこそが華文文芸の存亡の鍵となる問題である。』と説いた。

(2) 第2日 1月14日午前各方面への表敬訪問

午前9時30分胡杰氏と鄭德鏗氏の案内でバスに乗り文化部（文化省）を訪問、この役所は所謂シティ・ホールにある。イギリス時代からの重厚な建築物である。ここの応接室で鄭振治政務部長と会見した。氏はこんどの大会の政府内部の推進者の一人で、学生時代に華語教育を受けたこともある、謂わば“数少い”華語派理解者である。実はシンガポールの高級官僚や実権を握る華人政治家には、英語教育出身が多く、リークアンユー（李光耀）首相もそのような一人で、首相は選挙演説の必要から後年福建語と華語を学びとったという経歴がある。中には華人ではあるが全く華語ができず、母語の方言も辛うじてわかる程度の人もある。筆者は、この大会の終了後、ある華語塾を訪れた。上流階層し

か住めない高級マンション住宅の中に設けられた教室は豪華そのものの設備であった。習いに来るのは医師、弁護士をはじめとする高級知識分子で、華語も出来なくては華人社会の中である種の不便があるので“ひそかに”華語を習いに来る人々で、授業料もかなり高いらしい。つまりこの国には華語ができず英語しかできないことを、ある意味では階層の高さの表徴と考える人もあるが、今日では個別的な利害得失の観点から華語を習得する人もいるのである。筆者が研究調査の必要上教えを乞うた政府高級官僚は少なくないが、中には“華語は不得意なので、英語で話をしよう”という人もいた。このような空気の中で、鄭振治氏の如く英華の何れにも偏らず——氏には英文の著作がある——英語推進の政策の下で尚且つ華語・華文文芸の為に力を貸す人は貴重な存在である。氏はこの会見のときの談話の中で、シンガポール華人の方言やなまりの問題から英語の問題にまで触れながら、シンガポールの言語政策を紹介した。また、こんどの大会がシンガポールの華文文芸活動への刺戟になることを望むと述べた。

次に外国の作家たちは星洲日報を訪れ、社長周景銳、専務鄭氏威、編集長黎德源の各氏をはじめ多くの幹部と挨拶した。この地の華文文学は、新聞の文芸副刊の存在と切り離して考えることはできない。この懇談の中にも郁達夫や胡愈之などの関係者の名前が出て来た。

続いて南洋商報である。星洲と商報はこの地の業界を二分する競争社であるが、政府の強力な言語政策の指導を受けて、3月には合併された。社長黄錦西氏をはじめ鐘文苓、莫理光、李向、歐清池、杜南発ら各氏の話聞く。南洋商報は1982年に金獅賞なる文学賞を設けている。杜南発氏が文芸副刊《文林》について説明した。これに続いて英語紙二社を訪問した。ストレートタイムス社の編集長ナザン氏は日本語の読み書きがすぐれている。日本の軍政支配時代に習ったということである。

(3) 第2日、午後人民協会での討論会

午前の表敬訪問を終り、午後から本格的な日
理活動に入った。まず人民協会を訪れる。

協会はその昔カラン飛行場といわれた場所
にある、簡易建築物である。

人民協会では、李炯才副主席に挨拶した。既
に述べたように、文芸營の実質的な運営は協会
の陳聞察出版局長以下の事務局が当っており、
中国から来た作家たちも、持参した記念品を李
氏に贈呈した。暫し主客歓談の後に、講堂に移
り討論を始めた。

星洲日報の黎徳源氏の司会で、シンガポール
文芸研究会会長・シンガポール国立大学楊松年
博士とシンガポール作家協会会長黄孟文博士が
報告をした。

楊氏の演題は《戦前の新馬華文文芸》で、こ
の報告要旨は次の通りである。

『①戦前とは1919年から1942年までである。
1919年は新馬華文文学が誕生した年といわれ、
1942年はシンガポール・マレーシアが陥落した
年であり、それ以後全く別の段階に入ったので
ある。戦前の新馬華文文学の舞台はシンガポ
ールとペナンにあったが、この舞台に登場した人
物は新聞の文芸副刊の編集者と作家である。彼
らの大部分は中国大陸から来た人々で、文芸
の発展と活動の情熱に燃えていた。なぜなら彼
らは中国新文化運動の影響を強く受けた人々だ
ったからである。当時の新聞はペナンには《星
報》《光華日報》があり、シンガポールには《国
民日報》や《南洋商報》があった。これらの新
聞の文芸副刊は文芸を媒体として新知識や新文
化を鼓吹し、また中国の作品も紹介した。文章
は口語文と文語文が混在し、科学問題、男女同
学問題、如何にして中国人の社会意識を向上さ
せるかなどについても議論した。編集者も作家
も濃厚な僑民意識（海外居留中国人の意識）を
保持していたので、われわれはこれを“僑民意
識の濃厚な新馬文学”と称する。

②次は1925年に始る時期で、問題の中心は一
般的な社会問題から“南洋”の問題に移ってき
た。作家たちは濃厚な南洋思想を持ち、文化問
題に関心を抱いていた。それで、この時期のもの

を“南洋思想萌芽時期の新馬華文文学”という。

③三番目は1927年から始まる。中国国内情勢
の混乱のため多数の国内の文人が南来し、この
地域の華文文学に新しい思潮をもたらした。《新
国民日報》の副刊《星島》の責任者は馬華文学
（マレー華文文学）をつくり、新興文学の出現
を促そうと提唱した。1927年から1933年を“南
洋色彩提唱時期の新馬華文文学”と称する。

④1934年から1936年までは、シンガポールと
マレーの不景気のため文壇は衰退した。この時
代に話題を呼んだのは《地方作家談》の一文が
ひきおこした論争であった。その結論は、マラ
ヤの作品は自己の地方性をもつべきであるとい
うことであった。この時代を“マラヤの地方性
が提起された時期の文学”と称する。

⑤1937年から1942年の間は、新馬華文文学が
一つの高まりを示した時代で、国内の抗戦文芸
の影響を受け、海外の華文文学が隆盛に向った
時代である。この時代に郁達夫は《星洲日報》
の文芸副刊《晨星》の編集者となり、すべての
創作は抗日戦争に奉仕せよと強調した。それで
前記のマラヤ的な地方的意識は後退し、中国僑
民意識が再び抬頭した。この時期の文学を“地
方意識が挫折した時期の新馬華文文学”と称す
る。』楊松年博士の基本的観点は、中国人意識
から徐々に中国との関係が薄くなり、この土地
の人間の意識に転化してゆく変化の過程を、僑
民意識から南洋意識への転化として説明したも
のである。筆者はこれを中国的色彩から南洋的
色彩への転化を主軸にした“色彩史観”と規定
した。

“戦後から現在に至るマレーシア・シンガポ
ールの華文文学”と題して、黄孟文博士は次の
ように講演した。

『1965年シンガポールが独立する前は、シン
ガポールとマレーの両方を含めて馬華文学と称
した。しかし、両国の分離独立とともに文芸の
世界も二つに分れた。

戦後の馬華文学は戦前の伝統をうけついでも
のではあるが、思想意識はちがったものである。
現在シンガポールの華文文芸は新華文芸、マレ

ーシアのものを大馬華文文芸（或は馬華文芸）といっている。戦後のシンガポール華文文芸は次のいくつかの時期に分けられる。

①マレー華人の文芸か僑民の文芸かの論争のあった時期。

②緊急法令が公布実施された時期。

③反黄（反低俗）運動と愛国主義運動の時期。

④独立以後1979年まで、ならびに80年代の今日まで。

戦後のシンガポール文芸が戦前とちがった点は、日本軍の占領という試練を経て、人々はこれまでの仮ずまいの僑民意識を捨てて、この地に永住する人民としての自覚と意識を持ったことである。そこで意識形態の大転換が起り、作品の内容の面においても、植民地支配に反対する思潮が現れた。

①に述べた僑明文芸かそれとも馬華文芸かの論争は1947年後にくりひろげられたが、勝敗は決しなかった。その後新華文芸協会が報告を出してまとめ、馬華文芸はその独自性を保持すべきであるという方向をうち出した。

緊急法令が公布されてのち、言論は抑圧を受け、作家は政治を語らず、題材も二次的なものに限られた。

1965年、シンガポールがマラヤ連邦から分離独立してからは、国家は経済建設に重点を指向し、文化の推進はあまり重視しなかったが、70年代の後期に至り文芸団体が続々と成立し、多くの出版物を出し力を合わせて文芸を発展させるようになった。

80年代に入り、政府も懸命に文化活動を推進するようになったし、新聞社や出版社も多くの叢書を出した。現在、新聞社や諸団体はシンガポール文芸の次代を背負う後継者の育成に力をいれている。』

黄孟文博士は1965年のシンガポール独立以前を一括して馬華文芸（マレー華文文芸）とし、分離以後に文芸も分れたこと、華人意識形態が劇的な変化をしたこと、愛国の対象が変わったこと、新しい国家建設の中で文芸建国が始まっていることなど重要なことを述べて居り、今後のわれわ

れの研究にとっても基本的な問題を提起している。黄氏は日本占領時代の苦難について述べる時“友人今富氏を前において言うのは心苦しいが”と前おきしつつ華人の観点を詳しく吐露した。筆者はシンガポールを六回訪れたが、氏とは毎回会い教示を願っている。この講演が終ったのは午後4時である。

ついで黎徳源氏の司会で“作家の創作経験談”の講座に移った。

まず立って話をしたのは中国の作家蕭軍氏である。蕭氏は今年76才、30年代中国新文学史の上で一つの金字塔となった《八月の郷村》の作者であり、魯迅の愛弟子でもある。蕭軍氏が立つや、会場に拍手が湧いた。蕭軍氏に限らず、今回の大会では中国の老作家が現れると必らず熱狂的な歓迎を受けた。これについて、ある人はシンガポール・マレーシアの一定年令の華人は教科書の文章でこれら老大家の文章に接していたからだと説明したが、多分それだけが理由ではあるまい。

楊松年氏や黄孟文氏の講演にあるように、華人は古い僑民意識から現地の公民意識へと転化しつつあるのは事実であろうが、華人の意識の根底にはやはり中国大陸の偉大な文化に対する憧憬の念がある。今回シンガポールに来た中国の作家たちは、シンガポール華人のこの気持を満足させる中国からの使者に他ならない。文学と縁のない華人実業家たちがこの大会に敢て寄付をしたがったのも同様な心情の反映であろう。この空気の中で、中国の作家たちが甚だ淡淡たる態度に終始し、個人的な風格のみを通じてこの地の人々に印象を残していったのはよかった。

さて蕭軍氏はユーモラスな話し方で、自己の文学的成長の過程を紹介し、多く読み、多く書き、多く観察することを強調した。また自己の思想信条として、①中国の独立の実現を望む、②民族の解放を望む、③人民の解放を望む、④人が人を圧迫したり、搾取したりしない新社会の出現を望む。①と②は実現した、三番目の人民はまあ少しづつぼつぼつと解放されつつある

が、四番目は勿論全く達成していない、と述べたが、聴衆は共感の拍手を送った。

中国から来た老作家艾青氏は新疆ウイグル自治区に20年追放され、迫害されて右眼失明、蕭軍氏は約30年を牢獄と強制労働の中で過し、蕭乾氏も22年間の流刑と強制労働を体験している。これらの苦難の歴史がシンガポール華人の同情と尊敬の念を呼んだのであろう。シンガポールには、中国が現代化に成功し、国際経済の中で活躍するようになれば、シンガポール華語の地位を好転させるにちがいないと期待する考え方があがるが、この文芸賞に最も重要な賓客として中国の元老的作家が三人揃って出席したことが、これら華人に対する激励となったにちがいない。筆者は、シンガポール華人にこのような気持があり、中国作家との間に心情的に深いつながりがあるのは全く当然だと思う。シンガポール華人が脱中国化し、独自の道を進みつつあるのは事実だがこの地の華人史の実体は僅かに百年そこそこで、シンガポールが独立して18年しかたっていないのもまた事実なのである。シンガポールやマレーシアの華人文芸や意識形態を研究するとき、現実の事態と将来の展望、可能性は峻別する必要がある。

中国作家の知名度や異常な悲劇的体験が、シンガポール華人の関心を呼んだのは当然だが、他地域から参加した華人作家もこの地域では一定の知名度を持っており、シンガポール華人の注目を受けていた。

日本で中国現代文学として理解されるものは、一般には中国大陸の文学活動に限られるが、中国語—華語—で書かれた現代文学ということになれば事情は異ってくる。華語文学は中国大陸のほかには台湾・香港・マレーシア・シンガポール・タイ・フィリピン・北米大陸・ヨーロッパ・日本などに息づいている。——インドネシアには曾ってかなり存在したが現在は消滅に類しており、ベトナムの状況は不明である——。現在東南アジアだけで華人人口2200万から2500万人といわれ、上述のすべてをを合わせれば4000万人を超え、謂わば大陸の外にもう一つの

華語文化圏があるわけで、従って質的内容は不同ながら無視し得ない規模の華語文芸界が存在しているのである。この実態は日本でもあまり知られていないだけで、当該地域の人々にとって華文文学とか文壇と言えばこの方を指すのである。表現は適当ではないが、これを“海外中国文学”ということもある。だからアメリカその他の海外華語文芸界から参加した作家たちも、シンガポールではある程度の知名度を保っている人が多かった。如上の事情を考えるならば、今回の文芸賞が海外華語文学界と中国文学界の代表を一堂に集めたことは、歴史的創舉であり、また歴史に残る重大な意義を持つもので、シンガポールの主催者らがこれを強調するのは少しも過言ではない。

ここで、海外華語文学界から文芸賞に参加した人々を簡単に紹介する。

聶華苓(女)1925年生、湖北省出身。南京中央大学卒。1949年台湾に行き、台湾大学中文系で現代文学を教え、1964年から米国アイオワ大学で勤務。長篇小説《失去的金鈴子》(1964)、中篇《葛藤》(1953)をはじめ小説、散文の作品が多数ある。夫 PAUL ENGLE 氏も詩人でアイオワ大学の元教員である。聶華苓は華語の他英語の作品もある。その後中国訪問もしたことがある。

於梨華(女)浙江省出身、1947年に台湾に行き台湾大学歴史系卒業後、アメリカに行く。カリフォルニア大学に留学し、一年目に英文創作賞一位に入賞したのち、英文創作活動では成功せず、華文創作に転向。《夢回青河》など米華人の苦悶を描いた作品《也是秋天》《掃》《變》をはじめ多数あり、1975年に中国を訪れ《誰在西双版纳》などを作る。現在ニューヨーク州立大学講師。

鄭愁予、詩人。河北省出身、1933年生。軍人の父と共に台湾に移り、新竹で成長し中興大学を卒業。1968年アメリカ・アイオワ大学国際創作部で芸術学修士を獲得。登山家でもある。詩風は抒情が主で、最近中国の上海文芸に掲載されたものもある。詩集《夢土上》《衣鉢》《燕人

行》など多数。現在イエール大学中国語講師。

劉大任、詩人・小説家江西省出身、1939年生。台湾大学哲学系卒。ハワイ大学東西哲学研究員ののち、パークレーのカリフォルニア大学政治学修士、博士を獲得。小説《紅土印象》《蛹》などを作った。目下、長篇三部作《浮游群落》を書いている。現在国連職員。

彦火、香港で活躍中の文芸評論家・散文作家。1947年生。福建出身。《当代中国作家風貌》(1980・1982) はじめ作品多数。現在香港三聯書店勤務、《海洋文芸》編集者。

洛夫 詩人、台湾在住、1928年生、湖南省出身。15才のとき“野叟”のペンネームで散文《秋日的庭院》を新聞に発表。湖南大学から淡江大学外文系に転じて卒業。海軍軍人として20年勤務。中佐で退役後詩作に専念。詩集《靈沙》ほか多数。現在詩刊《創世紀》の編集長・東呉大学外文系講師。

蓉子(女) 台湾在住の詩人。1928年生、江蘇省出身。内戦時代に成長、南京金陵女子大学附属高校卒、農科大学一年で中退、(1949年)交通部国際放送局員として台北に赴任。50年以来詩作に従事、《月的南方》はじめ詩集多数。現在台湾文壇の“閩秀詩人”として最も生命が長い。夫羅門氏も詩人。

呉宏一 1943年生、高雄出身。台湾大学中国文学系教授。詩詞の研究家、《清代詩学初探》《常州派詩学研究》が有名。その他散文・詩作でも著書多数。

施穎洲、フィリピンの《連合日報》編集長。詩人、フィリピン華文文芸協会会長。訳詩集も多く、又《フィリピン短篇小説集》などの翻訳作品がある。氏の手がけた文芸副刊は氏の散文、評論など作品多数などで知られている。なお、現在フィリピンには四つの華文文芸団体がある。氏は英、華、スペイン、エスペラントの諸語に通じる。

方北方 1919年生。広東省出身。ペナン在住の馬華文学作家。作品は《頭家門下》、《娘惹和峇峇》《風雲三部曲》をはじめ長篇と短篇多数。現在韓江中高校教員、マレーシア華文作家協会

主席。筆者の研究では特に指導と協力を仰いでいる人である。

甄供、文芸評論家、マレーシア星洲日報文芸編集者。福建省出身。特にマレー語・華語文学作品の翻訳に熱心な活動家で、これにより華文文芸の向上を図ることを考えている。散文集に《春泥集》《里程集》がある。

陳雪風、文芸評論家、1935年生、広東省出身。マレーシア南洋商報編集者。詩人、散文家としても活躍。《十五年来の馬華詩歌》(1962) はじめ著作多数。

中国大陸から参加した元老作家については余りにも有名なので、詳しく述べないが、同道した夫人も中国文壇に地歩を占める作家たちである。例えば、蕭乾夫人文潔若女士は中国人民文学出版社の日本文学担当責任者で、《芥川竜之介小説選》はじめ翻訳作品は十五冊を越え、英、露両語にも長けその方面の訳著もある。

許世旭、韓国の詩人、1934年全羅北道出身。韓国外国語大学中文系卒業、台湾師範大学留学。61年以来華語詩作で活躍、また翻訳もある。現在母校の東洋語学部長。1982年の《許世旭自選集》は台湾出版の《中国新文学叢刊》の中に収められている。

今回の“文芸賞”には都合で参加できなかった作家、例えば日本でも知られている黄春明氏らがあるが、上述の作家らはシンガポールでも一定の知名度がある。

さきに述べた蕭軍氏について、経験談を語った於梨華女士の発言も傾聴に値したが女士は次のように述べた。

『アメリカの華文作家は相互に会う機会も少なく、日常生活は孤独である。勿論華文作家は専業にはできない。アメリカの華文作家のかかえる一つの問題は言語上の問題で、アメリカに三十年も住み英語生活をしていると、華語の力は徐々に衰えてくる、これが創作上の一つの問題となってくる。シンガポールの華語は英語・マレー語或は台湾語などの影響を受けているが、文学活動上は、却ってその為言語は豊かになっている。しかし、われわれが英語で創作

することはうまく行かない。よしんば、英語がどのようにできたとしても、それは所詮第二語文にすぎない。どうしても完全に達意の文章私を書くのは難しい。次に、私の書く題材だが、は中国の題材しか書けない。しかし、私は中国に生れて十七年で台湾に移り、まもなくアメリカに行った。わずか十七年間の中国の記憶はうすれて行く一方である。

われわれの文学を辺境文学だという人もいるが、私は作家は自分が熟知しているものを書くのが一番よいと思う。主題は東洋と西洋の相互理解の促進という方面に求め、異った二つの文化を深い視点から相互に紹介すべきだと思っている。シンガポールの若い作家が二つの言語をものにして精進するのはよいことだと思う。』

於梨華女士の発言は海外華語文学について研究すべき課題の端緒を数多く提供した。

次に報告した詩人洛夫は少年時代からの作詩生活を回顧しながら、詩の市場は小さい、詩は売れない。詩人は売れ具合を気にしないから却って純粹で自由な詩も書ける。また、現代詩は必らず生活の中から題材を求め、それを冷静に観察して、現代的な作法、新しい技巧、新しい形式で表現しなければならないと述べた。

鄭愁予は『少年時代沢山の詩を読んだが、抗日戦争時代の一部の詩人が書いた、ただ人々をけしかけるといふ作品は嫌いだ。詩人というものは自らは後方にいて前に居る人をけしかけべきでない。詩人は自己の真情を書いて、人の情熱を激発すべきものである。抗日戦争時代の専業の詩人の表現形式は単純に過ぎた。私は抗日戦争時代を転々と流浪し飢餓と死亡を目にしながら、成長した。各地を流浪した結果、最も愛するのはやはり中国の大地である。この漂泊が私の詩風を作った。現代詩には一つの秩序がなければならない、ただ感情に溺れるのは抒情とはいえない。私はこれまで中国現代詩は西欧から移植されたものだと信じて来たが、台湾の詩人もこれからは異なる形式、異なる手法、異なる題材でより多くの異なる路を求めて進むべきである。』と述べた。

最後に陳雪風が発言し、『創作の源泉は生活である。しかし、同時に美しい表現形式の役割もあり、そこで内容と形式の調和が必要になる。これまで文学作品に対して批評を加えて来たがそれは、向上を求めるために行なったのである。批評は攻撃非難であってはならない』と述べた。

この会場ではおよそ三百人あまりのシンガポールの文学愛好者が熱心に耳を傾けてまた若干の質疑応答なされたが、外国からの華人作家の声を聴く人々には特別の熱気があった。筆者は、国籍がどうであろうと、生活の基盤が如何にちがっていても、華人どうしのつながりはまだつよく活着ているのだと痛感した。従って“海外華文文学”には強固な地盤があることは間違いない。しかし、この地盤の今後の盛衰が問題になる。

この日のすべての発言は、華文文学の歴史についての考え方や所在の問題点などについて多くを提起し、啓蒙する所が多い。それらの何れをとっても現代華文文芸の研究の課題とするに値する。

(4) 第二日(1月14日)夜の星洲日報招宴

昼間の過密な日程のあと、すぐに夜は貿易センター内の倶楽部で星洲日報の招宴である。李炯才部長、何家良次長らも出席した。華人だけの宴会に参加した経験は多いが、この夜の食事は格別ににぎやかであった。

宴の進むにつれて余興も出たが、詩の朗誦、歌唱が続々と登場し、指名された者がことわらずすぐに立って応じたのは見事であった。

二日後の星洲日報には何盈氏が次の詩を寄せていた。

散尽萬金，也難求盛會如此。
 八方風雨，群賢齊集；
 昨夜，衆人皆醉。
 醉的不是茅苔、高粱、白蘭地，
 也不是山珍和海味。
 醉在詩情、才氣，
 暖歌和甜馨的回憶裡！

特に蕭軍氏の娘蕭耘の歌った中国東北地方（旧満洲地方）の民歌は人々を陶然とさせた。彼女は中国で正規の音楽教育を受けた教師でもあった。蕭軍氏も古詩《節婦吟》を朗誦し、続いて京劇《蕭何月下追韓信》を唱った。遠来の詩人が自作を朗誦したり、民歌、古詩を吟ずるのを聞いていたと感動した星洲日報文芸副刊の編集長范北羚氏が即興で次の詩を朗誦した。

正月的楼頭

載着南方的繁星閃耀
是那樣的亮，那樣的光
洒滿在你在我的心頭上
和歌、你唱、我唱
別問它是南調或是北腔
尽管說着的故事和遭遇不一樣
而有着相同因子的血液
却涌流在你我的胸膛

この夜艾青氏は病気で欠席したが、氏の詩「親親」が一人の青年によって朗誦された。

筆者は、華人知識人の宴会でこのような“放歌高吟”が見られたのははじめてであった。また、まる一日のずっしりつまった日程のあと、なおこのように楽しむことのできる人々の体力と精力には瞠目した。

なおシンガポールは午前6時に突然暗い闇が終り明るくなり、また午後6時に一挙に星が終り夜に入る。中間的な黄昏がないので、昼間行事から夜の行事に入るとき、非常に忙しい気がする。連日の日夜の行事で筆者が疲れたのはこのためであろう。

(5) 第三日(1月15日)午前 シンガポールの
各言語の文芸活動の報告 マンダリン
ホテル文華閣

何家良氏の司会で始ったが、最初の報告はシンガポール国立大学歴史系の李廷輝研究員が華文文芸の歴史について次のように報告した。

『シンガポール・マレーシア華文文芸——新馬華文文芸——の発展は三つの時代に区別することができる。それは、1919年から1942年、1945年から1965年、1965年から今日までの三つであ

る。第一の時代の作家は、左派と右派に分けられるが、この両派の作家の作品はいずれも帝国主義反対、封建主義反対の色彩を帯び、両者とも馬華文学の発展に対して支配的な影響を与えた。1937年に至り文芸界には日本の中国侵略から起った抗戦文学の新しい波が高まった。この時代の作品は一般に中国の政治の動きと関係があった。第一の時代の作品の多くは《星洲日報・南洋商報・新国民日報・総滙報》に載せられた。当時若干の雑誌はあったが、単行本は話にならぬ程に少なかった。第二の時代の作品にはより濃厚な政治的色彩があったが、この中で植民地主義反対の精神が高まった。作家と作品の数も大いに増えた。

1956年以後、はじめて中国の創作傾向の影響を脱し、シンガポール、マレーシアを対象とする、植民地主義政治に反対する、当地を対象にする愛国主義的テーマが増えた。この時期の作品の数は多く、出版された単行本だけでも500冊に上る。

新馬文芸が発展した第三の時代において、現代派が抬頭した。シンガポールとマレーシアの現代文学は台湾と欧米の風潮の影響を受けている。即ち、作家は自分を小さな世界のなかに閉じこめて創作をする、しかも作品の内容は人々にはわかりにくいものが多い。これは華文文芸には適しない。

最近シンガポールに起ったのは“建国文学”である。シンガポールは新興国家であり、華文文芸もその建国活動に参加しなければならない。』また、李氏は於梨華女士の質問に答え、『シンガポールの華文文芸が直面している問題はマレー語やタミール語の文芸と同じく作品の販路市場の問題である。』と答えた、この答えから察するに、英語作品の販路には問題がないかのようである。ほんとうは如何だろうか。

次に英語文芸作品について、国立大学のエドウィン・サンブー教授が次のように報告した。『シンガポールの英文作家の困難は①取材の困難②人物の言語をうまく組み合わせることが難しいことである。英文作家は異なる文化、言語背景

の出身である。例えば、華人、インド人、マレー人の三者の生活に対する見方、感情、理性及び作品主題に対する処理の仕方は異っている。

華語、マレー語、タミール語の作家の大部分はそれぞれの本来の文学的遺産、伝統的創作技術を継承しており、それはシンガポール人作家が用いてよいものであるが、英文創作の場合はちがう。何故なら英文創作の源流は主としてイギリス・アメリカなので、英語作家は前述の伝統と結びつくのが難しい。しかも戯曲・短篇・長篇を問わず、ちがった人種から取材するのだから、取材の面での統一性を欠く。これは他の言語の作家には見られない困難である。英語の作品では不可避免的に人物は必ず多数の人種に互り、社会全体の様相を反映しなければならないのである。故に英文作家は作中人物の背景と生活を考えたうえでその人物にふさわしい英語を語らせなければならない。問題は、シンガポールでは、如何なる人種も完全には英語化していないことである。従って、作中人物の言葉は当然真实性を欠くことになる。それゆえに、また作家は読者に作中人物の語る言葉がたしかにその人物の言葉なのだと思うさせるようにしなければならない。』エドウィン・サンブー教授の発言は文学問題のみならず、社会言語上の暗示に富むものである。

マレー語作家マスリ氏はマレー語作家が直面している問題について『生活水準が上るにつれて、マレー人は文化とか文学に関心を持たないようになった。物質上の享受と富の方に気をとられるからである。また、マレー語作品は読者が少ない上に、まじめな文学批評が欠乏しているため、出版社も出版をいやがる傾向がある。ましてや、英語教育を受け英語文学の方を好む者がマレー語作品を読むなどあり得ないことである。それにもかかわらずマレー語文学にもそれなりに発展する可能性はある。その理由として次の三点が挙げられる。①シンガポールには若い労働者作家がまだ少しいる。彼らの多くは英語教育を受けているがそれでもマレー語で書く気がある。②若い大学生には文化に対して積

極的な要求を抱きはじめ、マレー語を表現の手段にしたいというものがある。③関係当局はしばしば小規模な創作コンクールを催し、短篇小説集が続々と出版されている。④文学団体も新人の養成に留意し始め、新聞、雑誌、放送局も積極的に青年の創作活動を奨励している。

問題はマレー人作家が偉大な作品を作る力をもっているか否かである。』

タミール語作家ケサヴァン氏は次のように報告した。『シンガポールの二言語政策のもとで、英語はわれわれが生存するための必須言語ではあるが、民族の文化的伝統を保存する為に、母語教育もする必要がある。しかし、大多数のインド人の父兄は子弟を英語系学校にいられているので、子弟の読むのは英語で書いた作品が大部分である。この国にタミール語系の学校は殆んど皆無である。シンガポールのタミール文芸は十九世紀に始まり、詩歌、小説、戯曲がある。シンガポール放送局や新聞雑誌もふだんにタミール文学の成長発展に力を貸してくれるが、なにしろ若い世代の大部分が英語系教育を受けているので作品を書いても、読者がおらず、専業作家の出現はあり得ない。それでもタミール作家は自費出版をしているので、タミール文芸は何とか存続している。それはこの文学の存在がなおインド人社会の注視を受けていることを語っている。』

華文文芸以外の三つの言語の関係者の発言内容は、華文作家と全く関係がないのではない。これらの文芸が面臨する諸問題は、将来華文文芸の上にも起るかも知れないことばかりである。ひとことで言えば、ここに提供されたのは多民族国家、多言語国家に起るべくして起る問題である。この日、それぞれの言語による文芸、歴史の専門家の報告をまとめて聴くことができたのは幸であった。

(6) 第三日(1月15日)午後、作家の創作体験談の続き。

第二日午後の経験談の項目の続きが行なわれた。何家良氏が司会し、登壇したのは蕭乾、劉

大任、施穎洲、蓉子、方北方、彦火の諸氏であった。艾青氏もおくれて登場したが、耳が痛いとのことで、発言はしなかった。蕭乾氏は『私は老作家といわれるよりは、老記者といわれる方が嬉しい。私が記者として編集の仕事に携わっているときに書いた報告文学は職業的な作品といえるが、私は記者生活で人生の体験を重ね、それが後の文芸創作の用意になった。新聞の文芸副刊は世界中の華語新聞の特徴となっているが、副刊は無名青年の中から人材を発掘するのに役に立つ。沢山の有名作家、例えば魯迅も文芸副刊から登場した。』と述べた。

劉大任氏は『私は北アメリカから来た流亡作家である。大陸で生まれ台湾で成長した。しかし私は今日の中国大陸の社会、文化、政治に帰属感をもつことはできないが、台湾からも排除追放をされたような感じを抱いている。思うに五四運動以来の作家はすべて左翼意識形態でやって来たが、私はマルクスの後に出た多くの社会科学者の成果も試みて見たいと思った。彼らは人類社会の問題や現象について異った解釈や分析をしている。私はこれらの中から何らかの方法を吸収して社会と自己を観察したいと思った。』と述べた。

施穎洲氏の発言『私は三才で中国からフィリピンに渡り、六十才になった。小学生のときに金瓶梅をかくれて読んだ。一番感激したのは十七八才の頃巴金の《文学季刊》に新詩を投稿して採用されたことだ。このとき自分の名前が郭沫若、茅盾、巴金らと並んで印刷されているのを見て、嬉しくてたまらず、本屋に出ているのを全部買いつけて持ち帰った。第二次大戦中は、何もできなかったので逼塞して読書にふけた。その意味では華文文芸は中断してはいない。私は30年間に数千首の外国の詩を翻訳したが、翻訳のときの最も大切なことは原作の精神に忠実であること、即ち“信”が第一で“雅”はそれほど主要ではない。』この話からもわかるように、南洋華人の文化教養、アイデンティティの根幹は何といっても中国にあり、この状況は簡単には変るまい。

蓉子女士の発言『詩作は魚釣りのようなもので、運がよければ釣れるが、一日中坐って居てもダメな日もある。しかし、大事なことはその池の中に確かに魚がいることで、それに忍耐力と技術が加わってはじめて成果がある。若し魚がなければ、努力も忍耐も無駄である。』彼女の話の途中で、艾青氏が病身を推して壇上の一隅のソファに坐った。蓉子女士は叮嚀に握手と礼をして、それがまた満場の拍手を呼んだ。華人はここに象徴される大陸と台湾の一体化を渴望しているのである。そしてそのよすがとなるかもわからぬこの会場を提供していることに誇りを感じているものと見えた。

方北方氏は、自分の創作経験談を語る代りにと、この日の早朝書いた2000字の短篇小説を朗読した。題は《父の行きたかった路を子は歩いた（父想走的，児走了）》である。早く父と死別した少年が父の志を継いで作家になるという物語である。朗読が終るや聶華苓と於梨華両女士がかけよって涙をふきながら握手を求めた。

彦火氏の発言『中国新文学の研究資料には意外に誤りが多いので、正確なものを作ろうと思い立った。……私は近い将来華文文壇には1940年代に見たような影響力のある作家が現れるものと考えてに至った。広義に言えばそれは大陸の作家とは限らない、海外或はシンガポールの作家であるかも知れない。』

この日の諸発言からもわかるように、華文文芸作家にはさまざまな型があり、世界の各地に拡散しながら、自己主張をやめない。

(7) 第三日夜（1月15日）、招宴、於翠華樓

夜は李炯才部長の招宴である。この席に韓国詩人許世旭氏がはじめて到着参加した。この夜は人民協会の楽団が参加して興を添えた。李部長も琴を弾いた。そして誰もが詩を吟じ、歌を唱った。

(8) 第四日（1月16日）、午前 マンダリンホテル文華閣

午前の題目は《華文文芸と世界文芸》（聶華

苓)と《日本における馬華文芸研究》(今富正巳)で、司会者は国立大学の王潤華博士である。

聶華苓女士講演の一部『私はアメリカに来てアイオワ大学創作室に行き一人の中国人として自己の国の為は何を為すべきかと反省し、私は一人の作家として、中国人として再生した。そこで私は多くの外国作家と会った結果およそ作家の作品はみな共通の言語だということを悟った。大陸・台湾シンガポールの文学は何れも孤立したものではない。ところが、中国の作家はアメリカや外国の作品のことを知悉しているが、アメリカの作家は中国の作品を全く知らない。華文文学は世界の中で忘れられている。とに角英語に訳さねばならないと思っている。』

次に筆者は、日本の馬華文学及びその周辺の研究状況や、研究者として山本哲也、小木裕文、桜井明治、田中宏、高沢裕之らの諸氏と筆者の研究内容を紹介した。次いで筆者は社会言語学的に見たシンガポールの華語の現況と前途の危機的状況を分析して報告したが、この国ではこの種の問題は敏感問題 (Sensible Issue) として、口にし難い話題である。研究の立場から些かも遠慮せずに現状を解明したのに対して多くの研究者や聴衆から“華人が言わんとして言えないことを、公開の場に乘せてくれた”と評価された。筆者の報告を以て、午前の予定は中断し、当地の国際風あげ祭りの見学に向うことになったが、聴衆は風あげは重要事ではないのだから、筆者だけは会場に残って聴衆と討論会を続けようとする強い要求が出た。人民協会の陳聞察氏が、本日の日程を消化したあとに、特に筆者のために時間を設けるからということによって解決した。午後の与えられた時間、筆者はシンガポールとマレーシアの華文文学の社会背景の相異や、前途について述べ、特に南洋華人の歴史的産物としての華人知識人の責任について述べた。

二日後の星洲日報文芸版には、次のような筆者に与える詩が掲載された。作者とは勿論面識はない。シンガポールの文芸愛好者たちが、筆者の講演に強く反応してくれたことに対し深く感謝している。

給今富正巳 莎笳 作

洞查我們的地層
指出薄弱的所在
幽默的笑談里
飽含深切的關懷
送給你如雷的掌聲
謝謝你对華文的熱愛

なお聶華苓女士はこの日の講演の冒頭で、『私は漢口の日本租界で育ったので、小さいときから日本人が憎くかった。(笑声と拍手)ところが今日は日本人の今富氏と壇上にならんで坐り、話をするようになった。私はこの華文文芸を愛する日本の友人を尊敬している。私の敬意を表わすために、私の本二冊をここで今富氏に贈呈したい。(拍手)』と述べ壇上で二冊の本を私に手渡してくれた。

とに角今回の大会の全会期を通じて、戦争或は政治における日本帝国主義の仕儀が話題に上らない日はなかった。これらの人々にとって、戦前、戦中、戦後の日本人は連続して像を結んでいる。

(9) 第四日(1月16日)午後 マンダリンホテル文華閣

午後の題は“新聞と文芸”である。楊松年氏が司会し、蕭乾、施穎洲、謝克、甄供、黄彬華の五氏が登壇した。

蕭乾氏は『報告文学は散文の一形式であるが、小説ではない。小説は典型化があるが報告文学は原型のみを書く。中国の報告文学は五四運動から始まるが、特に30年代、抗日戦争で発展した。1979年から1981年間の報告文学の数は一千八百篇に上り、一万字を越すものも少なくない。』と発言、

蕭軍氏も特に次の様に発言した。『編集者は無名の英雄で縁の下の力持ちである。編集者が個人の好みに基づいて、職権を濫用するのが一番悪い。報告文学はニュースと文学の結合したものである。だから歴史小説はあるが、歴史報告文学はあり得ない。』

施穎洲氏『私は《連合日報》の総編集長をし

ているが、自ら詩作、翻訳をするので文芸副刊や作品には特に注意している。現在フィリピンの華人は30万人、作品を書く人は数十人である。副刊に寄せる小説は5千字を越えないのがよい。シンガポールの人は創作技巧で大陸や台湾の真似はしない方がよい。』

謝克氏——南洋商報文芸副刊の責任者——は、文芸副刊の歴史的功績を述べるとともに、シンガポール文芸副刊史上の編集者の中の功労者を次のように紹介した。『1938年末に星洲日報文芸副刊の編集者となった郁達夫は鉄抗、王君実、苗秀らを発掘した。南洋商報副刊の杏影は1954年から1967年の逝去まで李向、林臻、堅石、原甸、牧羚奴、鍾其、魏萌、汀上白、文丁、征雁、宋丹、長謡らを育てた。姚紫もすぐれた編集者であり、呉家、君盈緑、依汎倫らを育てた。曾鉄忱も苗芒を育て、呉紹葆は范北羚を生んだ。方修も宋雅、宋丹、忠揚、呉宜、蕪羊、石劍洪、丘文華、麦文、蔡欣、莎茄、梅拉、人間、康輝城、黄今英、章欽、志士ら実に多くの作家を育てた。この他にすぐれた編集者として、陳振夏、林建安、劉世朝、黄科梅、黄克、完顏籍、李向、長河、連奇、林臻、章瀚、程茂徳、林福利らがある。』

甄供氏発言『マレーシアでも、副刊は華文文芸の保母である。70年・80年代マレーシアの文芸副刊を有する新聞は四社で、南洋商報“読者文芸”鍾夏田編集、星洲日報“文芸春秋”甄供編集、星嶺日報“文芸公園”方北方編集、通報“文風”周清嘯編集がある。現在マレーシアの作品水準は、余り高くない。』

黄彬華氏の発言『新馬華文文学の始まりは1919年で、それを載せたのは“新国民日報”の副刊《新国民雑誌》というのが定説になっているが、純白活文の副刊はもう一つの副刊《南風》と《叻報》の《星光》で、そこから馬華新文学の新しい一頁は始まった。馬華新文学と新聞が不可分の関係を生じた理由は次の三点である。①新聞の編集方針、基本内容が全く中国と同じであったこと。②当時出版社が弱体で、雑誌が少なかった。③この地域の新聞は長期に亘って

中国から南来した文化人の手に委ねられたので彼らの好みが反映した。それはそれで大変よい結果を生んだ。馬華文学の拡張期、副刊も改革された。日本が中国を侵略し、太平洋戦争は迫っていた。救亡運動は盛んになり抗戦文芸が主流を占めたのみならず、馬華文学そのものが未曾有の隆盛を迎えた。この時代の副刊の特徴は次の四点である。①新聞社が紙面を不定期に同人団体に貸出す時代は終わった。②新聞社自身がつくる副刊が増えた。③その副刊の作者の範囲が広がった。審査もきびしくなり、内容も向上した。④各社の方向は一致し、抗戦文芸で固まった。戦後は読者を増やすために副刊の頁数や種類が増えた、そこで馬華文学が重要な役割を演じた。それで、文芸は普通教育の重要な手段になった。しかし新聞本来の角度から見て純文芸が一体どれだけの読者をひきつけられるのか疑われだした。副刊はもう親を離れて一人歩きをするときが来たのではないか。』

この日の夜は貿易センタービル金風楼にて南洋商報の招宴があった。

(10) 第五日(1月17日)午前、観光バスで市内見学。

車中で蕭軍氏が観光局のガイド慕青女士に「你的愛人？」と問うたが、相手には通じない。他の人が蕭軍氏に向い、ここでは夫のことは“丈夫”か“老公”というのだと説明したところ、氏は不満気に“野暮”だと言。因みにガイド女士の夫はインド人である。シンガポリアンの意識形成はかなり進んでいる。

(11) 第五日(1月17日)午後 国立大学講堂

“大学と文芸”の題で討論会となる。林徐典中文系主任が司会。蕭軍、方北方、呉宏一、蕭乾、於梨華、聶華苓、許世旭の諸氏が発言。主題がつかみ難く、誰も発言し難い様子であった。その中で一つ二つを拾おう。

於梨華『私は台湾大学英文系に入ったが英語の成績不良で歴史系に追出された。アメリカで努力して、英語小説で一位の賞金をとったこと

がある。要は努力だ、才能ではない。』

許世旭『学生時代に習作を書け、学生は面の皮を厚くして、人に見せられる時代だ。』

蕭軍『大学を十年学んでも作家にはなれない。作家になるには生活の体験が必要だ。』

聶華苓『アイオワ大学には、創作によって修士と博士の学位を与える課程がある。』

その日の夕刻、大学の教員クラブで晩餐会、酒のない質素なバイキングである。

(11) 第六日(1月18日)午前、人民協会講堂。

“シンガポール華文文学の前途について”

討論会、司会者は昆灿氏。この日艾青氏がはじめて発言した。『シンガポールの華文文芸の活動は盛んであるが、学校教育の場で華語が英語にとって代られて、第二言語となっている。華人の多くの作品が教科書から消えていくのが心配だ。

中国には百種類の文芸出版物があるが、小説が圧倒的に多く、詩は少ない。中国作家協会が名前を中国小説協会とした方がよい。これは冗談だが。』

聶華苓『ルーツの問題は創作の源泉である。シンガポール華人の祖先は中国から来たことを自覚しているが、若者の世代は、心から自分をシンガポール人と認め、この国を祖国と考えている。』

洛夫『文学の発展には出版物が必要であるから、シンガポールは今後、文芸出版物と同人雑誌を発展させねばならない。また強力な文学賞、賞金を設けるべきであろう。新人の発掘という面で、香港の人々の協力が望まれる。』

文潔若『シンガポール政府第二副総理ラジャラン氏は、蕭乾の古い友人である、このほど副総理の自宅を訪れたが、生活ぶりはとても質素で、家は十年前にローンを借りて建てたもので、家のまわりに高い塀もなく、警備員も、何時間か当番が立つだけであった。深い印象を受けたので、帰国したらこれについてルポルタージュを書く予定である。』

蔡子『華文文学の発展は華文教育の水準と深

くかわりがある。』

蕭軍『シンガポールの四つの言語の創作は何れも自由な発展が許されている。言語は手段に過ぎないのだから、どれで書くかは個人の自由であろう。強制することはできない。』

高瑛(艾青夫人)『華文文芸の推進のためにはさまざまな措置が必要であるが、まず第一は華語教育の充実で、次は質のよい出版物を沢山出すことであろう。

私は詩が好きだが、中国の大躍進以後は詩を読まなかった。あんな詩を読むと胃が悪くなるばかりだった。』

彦火『香港の華文文芸は、市場のせまいこと、中国大陸にも台湾にも進出できないこと、原価が高いこと、娯楽的作品が多いこと、当局は華文文芸を支持していないことなどが重なり困難に直面している。逆に、外部からの輸入には何らの制限もない。この特殊条件を利用すれば発展の路もある。シンガポールと香港の出版社がもっと協力すれば有益なしごとができる。』

方北方『海水の到達する所には華人が住む、華文文芸に前途がない筈がない。東南アジアの華語新聞の発展は、結果的に華文文芸の発展を約束している。』

(12) 第6日(1月18日)中食会。郵攝治部長の招宴、アポロホテル。

華人、マレー人、インド人を含む政治家要人、大学幹部らも出席。

(13) 第6日(1月18日)午後、人民協会にて午前に続いて、同じ“華文文芸の前途”の討論会。

司会者は黎徳源氏。黎徳源『華文文芸も、在米作家、シンガポール・マレーシア作家、大陸作家、台湾作家でその環境条件や困難もみな異なる。この現実を考えつつ、発展への路を述べてほしい。』

聶華苓『毎年少くとも一人、シンガポールからアイオワ大学の国際創作組に参加させてほしい。』

今富『シンガポールの華語教育水準や華語の前途が問題視されているが、それならば、もっと平易な華語を用いる工夫はできないか。五四運動の当時文語から口語に移ったように、従来の口語文から更に新しい口語文に転換すればよい。それでも高度の思想内容を表現することには少しも差支えないはずである。タン・コク・センの *Son of Singapore* は英語であるが、正にやさしい英語だ。華文作家はこれを参考にすればよい。方北方氏の文章も比較的平易である。

シンガポールの新聞は書評の為の配慮が不十分である。この点日本の新聞は参考になる。

新馬華文文芸の市場の広さが話題になったが、中国大陸が今後新馬華文文芸や海外文芸に関心を持つことが切望される。』

劉大任『華文文芸の市場開拓の為には人々の読書愛好精神が必要だが、その奨励の為にいろいろと金がかかる。その金は政府や民間から集めるべきだが、但し、文芸の独立自主性は失ってはならない。』

聶華荅『今後、もっと実のある文学賞、賞金制度を創設すべきだ。シンガポールの華人富豪に期待したい。』

陳雪風『新馬華文文芸作家は内容(現実主義)と技巧(現代的技巧)を統一させ、古くさい手法から脱脚すべきだ。』

方北方『新馬華文文学は中国新文学と明らかに別のものになった。これは当地を故郷とする華人の郷土文学である。また華人作家は華人の面ばかりを強調するのではなく、自己の住む国の公民であることを考え、国家文学の建設にも力を尽すべきだ。作品の中にはマレー人やインド人の生活も反映させ、各民族との文化交流にも意を注ぐべきである。』

シンガポールの作家田流、筆農の両氏が文芸副刊、出版社の協力を期待する発言をした。このとき、聴衆の中の若い愛好者から半ば抗議を含んだ発言がされた。その主旨は『①今回の“文芸賞”は既成の大きな組織が中心になって主催した。シンガポールには青年や学生を主体にした文芸団体が若干あるが、何故これらの団体に

協力を呼びかけなかったのか。真に新馬華文文学の発展を願って実践活動をするのならば、これらの文芸団体を無視するのは矛盾している。また文芸賞の出席参加者が限定されているのはおかしい、望む者はすべて入場させるべきだ。』ということであった。この発言に対する回答処理は明確ではなかった。筆者の知る所ではシンガポールの青年文芸団体は思想的に特に問題がある組織ではないので、これを排除する必要はないと思うが、これら団体の相対的位置づけがわからないので早急な判断はできない。

(14) 第7日(1月19日)午前9:30終結会議
壇上に文芸賞工委会副主席陳敬賢、周景銳、事務局局長陳聞察、研究主任黎德源の諸氏が着席して開会。

華語で“結束会議”といわれるこの会議は“検討会”又は“反省会”に相当するものであった。長い会議のあとの“まとめ”として行なうこの慣習は大変よいことだと思った。主催者側を代表して陳聞察氏が、『ここで、この七日間におたる文芸賞に対する批評を意見を聞きたいが、われわれは諸先生を個人の資格で招いたのであるから、これからの御意見も個人的な資格で自由に発表してほしい』と要望した。

艾青『私はこの大会に出席するまでは、この大会の重要性に気がつかなかった。討論の題目は一点に集中していたと思う。これは東南アジアの華文文学全体にとって意義があった。今後、つとめてシンガポールにも寄稿したい。』

蕭軍『今後、第二回、第三回の文芸賞が開かれるように希望する。しかし、今後この大会はもっと質素にやることを望む。』

蕭乾『この大会によって私は華文文芸の重要性を認識した。その重要性は文学自身、言語自身以上のものであることを認識した。私は中国に帰っても、あらゆる努力をして、この国の華文文芸の生命が続くように努力したい。』

彦火『これまで、シンガポールの読者は香港、台湾、大陸の作家をよく知っているが、三つの地域の人々はシンガポールの作家のことを知ら

なさすぎる。これは不平等、不公平なことだ。私は出版活動者として、是正に努力したい。』

蓉子『早い時期に、予定や題目や準備すべきことを知らされていれば、もっとよかった。』

洛夫『若し第二回の文芸賞があるならば、グループに分れて討論するとよい。』

許世旭『台湾海峡兩岸の作家が一堂に会したことは重大なことだ。この歴史的な機会を提供したシンガポールの政府と人民に感謝したい。今後、シンガポールの作品の翻訳につとめたい。』

甄供『文芸賞の開催により、情況が変化するように望む。シンガポールとマレーシアの華文文芸が更に協力を密にさせて共に進みたい。』

今富『この大会の議論や発言において、この数十年の日本の行為に対する批判がなかった日はなかった。お詫びしたい。今後も皆さんと共に華文文芸の発展の為に努力したいが、シンガポールの青年文芸団体への支援を期待する。彼らこそ真のシンガポリアンである。』

鄭愁予『開会する前に、この国の出版状況、等についての具体的数字の資料が欲しかった。』

劉大任『華文文芸の前途問題を語れば、必ずルーツの問題につきあたる。一つの文化伝統が現代化してゆく過程で、徐々に見失われるのはルーツ（根）だ。そこで必ずルーツ探し（尋根）をする人が現れる。それが文学者の仕事でもある。』

(15) 第7日（1月19日）夜、閉幕式

夜7時30分から閉幕式を挙げる。鄭振治部長は次のように挨拶した。『七日間にわたる討議で、直ちに何か影響や結果は見られないだろうが、長い目で見れば、必ずこの国の文芸の推進に役割を果たすものと思う。シンガポールは多民族国家で言語と教育の問題は細心に処理しなければ、不公平の結果を招きやすい。シンガポールの文芸に花が咲き、実を結ぶのは遠い将来になると思うが、諸地域の作家がシンガポールの文芸の畑に肥料をかけて下さるように願う。』

これに続き最後の送別宴となり、シンガポー

ルの各界の人々と歓談して散会した。

むすび

シンガポールは広さは淡路島ぐらい、人口は名古屋ほどの小さな資源のない島である。1965年の独立後、上下を挙げて経済建設に励み、今ではアジアでは有数の国民総生産をもつ国になった。独立から18年たった今日、国際華文文芸賞が挙行されたことには、一定の意義がある。この大会では、華文文芸の過去について諸研究者が整理分析をした、また多言語社会独特の問題も提起された。それらの報告や発言の間には矛盾がないこともない。しかし、多くの意見が出されたことは、そのまま今後の研究者に対する問題提起となった。華文文芸の前途についての発言も同じく有益であり、多くの提案や可能性が語られた。

ゆえに、この大会は事実上華文文芸のためのすぐれた総括と展望の作業でもあった。

華文学は中国大陸の外部にも、地下水脈のごとく、世界の各地に広がっていることが今さらのごとくに認識された。シンガポールはそのような華文学の発展史上、偉大な創舉をしたのである。或は東西の接点を以て自任するシンガポールにしてはじめて為し得ることかも知れない。

文芸賞が終った後、シンガポールの新聞文芸欄には、文芸賞とは一体何だったのだろうか。これでシンガポール文芸は何か得たのだろうかと疑う論調や、自嘲の声さえ聞かれた。しかし、筆者はシンガポールの友人たちに訴えたい。この歴史的な創舉には大きな意義があつたし、有効性もあるのである。新馬華文文芸はこの大会で為された総括を一つの踏み台として必ず次の高度に向って飛翔するにちがいない。進歩と発展は盲目的には為されない、このような意識的な分析と総括ののちに文学運動は進んでゆくものだ。それは中国新文運動史が証明している。今日の文芸愛好者にそれができないならば、将来の愛好者、新しいシンガポリアンがそれを成しとげるにちがいない。

日本に住む研究者の立場において、筆者の得たものは説明し難い程に大きいものがあった。新馬華文文芸の研究の為に筆者は雄大な展望を得たような気がしている。このノートの末尾をかりて、シンガポールの才李炯氏、鄭振治氏、何家良氏、陳聞察氏らはじめ、多くの人々に衷心から感謝の意を表す次第である。

参 考 文 献

VICTOR PURCEL 著

郭湘章訳 1969 《東南亜之華僑(上・下)国立編訳館

陳烈甫著 1979 《東南亜の華僑, 華人与華裔》正中書局

楊建成 1982 《THE MALAYSIAN CHINESE IN A DILEMMA》文史哲出版社

吳天才 1975 《馬來文芸作品分類目錄》マラヤ大学中文系

苗秀 1968 《馬華文学史話》青年書局

方修 1972 《馬華新文学大系理論批評一集》世界書局

方北方 1981 《馬華文芸泛論》馬來西亞写作者(華人)協会

苗秀 1974 《新馬華文文学大系・理論一集》教育出版社

黄孟文 1979 《新馬文芸論叢》世界書局

方修 1962 《馬華新文学史稿上下》世界書局

崔貴強・古鴻建 1978 《東南亜華人問題之研究》教育出版社

楊松年 1982 《新馬華文文学論集》南洋商報

鄭良樹 1982 《馬來西亞・新加坡華人文化史論叢卷一》南洋学会

楊松年・周維介 1980 《新加坡早期華人報章文芸副刊研究》教育出版社

郁達夫 1977 《郁達夫抗戰論文集》世界書局

MAHATHIR bin MOHAMAD 著 劉鑑詮 訳 1981 《THE MALAY DILEMMA》世界書局

方修 1974 《馬華新文学及其歴史輪廓》万里文化企業

原甸 1981 《香港・星馬・文芸》万里書局

伍良之 1680 《串鈴篇》泛亞書局

吳元華 1978 《新加坡的社会語言》教育出版社

趙戎 1967 《論馬華作家与作品》青年書局

柏楊 1982 《新加坡共和国華文文学選集》時報出版公司

吳華 1980 《馬來西亞華族會館史略》東南亜研究所

太田勇・森川久次郎・今富正巳・谷口房男 1981 《マレーシア・シンガポール華人社会の変貌》昭和55年度東洋大学特別研究報告書

今富正巳 1982 《シンガポール華人の言語生活についての調査》東洋大学アジア・アフリカ文化研究所研究年報16号

今富正巳 1983 《マレーシア華人の言語と華文文学の調査報告》東洋大学アジア・アフリカ文化研究所研究年報17号

今富正巳 1982 《マレーシアの華語教育と華文学》昭和56年度東洋大学特別研究報告

今富正巳 1983 《マレーシアの華語・華文文学とその存立背景》昭和57年度東洋大学特別研究報告

梁良貫 1977 《都門小集》玲華印務局

TAN KOK SENG 1972 《SON OF SINGAPOR》HEINEMAN ASIA

TAN KOK SENG 1973 《MAN OF MALAY-SIA》HEINEMAN ASIA

綾部恒雄・永積昭 1983 《マレーシア》弘文堂

小木裕文 1980 《馬華文学と中国作家》雑誌中国語1980. 7

小木裕文 1976 《馬華作家小伝》中京大学教養論叢 1976. 17号, 18号

小木裕文 1981 《馬華文学の最近の動向》中国文芸研究会会報 1981 30号

山本哲也 時期不詳《馬華文学とその作品》雑誌中国語

桜井明治 1979 《馬華文学と中国文学》私学研修, 1979 85号

桜井明治 1976 《文学作品を通じて見たシンガポールの華人社会》Asia Review 1976. 春季号

方修著, 田中宏訳 1973 《馬華新文学とその発展過程》Asia Review 1973. 2号

高沢裕之 1975 《マレーシアの言語状況と文芸活動》Asia Review 1975. 2号

小木裕文 1982 《シンガポール華人社会と華語教育》中京大学教養論叢 23卷・3号

賴観福 1982 《馬華文化探討》馬來西亞留台校友

国際華文文芸賞ノート

会連合総会

田農 1983. 2 《文学与社会》拉讓出版社
G・アレキサンダー 1973 《華僑・見えざる中国》
サイマル出版会
日本経済新聞 1981 《華僑》日本経済新聞社
高橋弘殷 1980 《シンガポールからの報告》日本

放送出版会

谷沢慎一郎 1981 《シンガポールの成功》サイマル出版会
新加坡南洋大学創作社 1960 《論馬華文芸の独特性》南洋大学創作社